



# 日本植物分類学会 ニュースレター

No. 32

Feb. 2009

## 目 次

新会長あいさつ.....	2
新評議員あいさつ.....	3
役員等一覧（任期：2009年1月1日～2010年12月31日）.....	4
諸報告.....	5
第8回日本植物分類学会賞（学会賞・奨励賞）受賞者の決定.....	5
第3回日本植物分類学会論文賞の決定.....	6
2008年度日本植物分類学会講演会の報告.....	6
植物分類学会講演会に参加して.....	7
2008年度第1回メール評議員会議事抄録.....	7
庶務報告（2008年11月～2009年1月）.....	8
お知らせ.....	8
日本植物分類学会第8回大会公開シンポジウムのお知らせ.....	8
2009年度総会における審議事項.....	9
評議員会開催のお知らせ.....	14
2009年度野外研修会のお知らせ.....	14
寄稿.....	15
大型加速器 SPring-8 と白亜紀の花化石— X線マイクロ CT のよもやま話—.....	15
書評.....	16
樹木の種類を覚えるのがちょっと苦手な人に.....	16
いきもの便り.....	18
イカリソウ—春の訪れを告げる花—.....	18
旭山のトガリフカアミガサタケ.....	19
会員消息.....	20

## 新会長あいさつ

戸部 博

今年度から会長を務めることになりました。2年間よろしくお祈いします。分類学会が今日の形になって10年近くになります。その前は「日本植物分類学会」と「植物分類地理学会」という2つの学会でした。それらを統合したのが今の学会です。当時「日本植物分類学会」には独自のジャーナルがありませんでした（会報はありました）。欲しいとは思っても国内には既に幾つかのジャーナルが存在し、新たに発行することは無理な状況でした。

一方、「植物分類地理学会」には『植物分類、地理』（Acta Phytotaxonomica et Geobotanica [APG ]）という英文・和文論文の混合からなるジャーナルを持っておりました。世界に通用するジャーナルとして何とか英文専門誌にしたいと思いましたが、パワー不足でした。そこで考えられたのが2つの学会の統合でした。そのころでも企業統合は日常茶飯でしたが、学会が統合するというのは画期的なことでした。幸い2つの学会の会員の重複は少なく、統合はそれぞれの学会の希望を満たしてくれることになりました。すなわち、英文専門誌の『APG』、和文誌の『分類』が発行できるようになったほか、分類学会から引き継いだ「ニュースレター」と「春の大会」、分類地理学会から引き継いだ「秋の講演会」と「野外研修会」が統合後も活発に続けられています。会員数も統合当時よりも増えて現在は900名近くになりました。年会費を値上げすることもなく、これだけの活動を続けてきたことは奇跡的と言えます。しかし、あとで取り上げるように、現実にはこれらの活動を維持するために赤字経営が続いています。

さて、会長を引き継ぐことになり、分類学会の活動、あるいは基礎科学としての分類学の研究推進のために、幾つかの進めてみたい目標を考えてみました。と言っても、新たに

取り組むというのではなく、従来の活動を推し進めることに他なりません。その一つは、ジャーナルの充実です。ジャーナルは研究活動を形にあらわしたもので、

言わば学会の顔です。『APG』は年3回、『分類』は年2回発行されております。このうち『APG』は2004年以降ほぼ年3回発行されてきております。そこで年4回発行は当面の目標になるでしょう。発行数を増やして回転を早くすれば、投稿してから印刷されるまでの待ち時間が少なくなり、論文を投稿した人にとっては少なからずメリットがあります。ただ年4回発行するためには何よりも良い論文の数が必要になります。経費も増えます。

もう一つは、『植物分類学研究マニュアル』の編集と発行です。この企画は、10年以上も前、他の分野でさまざまな実験プロトコルが出版されていて、そうした流れに触発されて始まりました。分類学の世界でも研究方法が多様化してきたことも背景にありました。事実、標本作成、サンプルの保存、形態観察、分子を利用した研究法など、さまざまな方法が現在利用されています。しかし、一人の研究者ができる研究手法には限りがあり、学生指導にあたっては、さらに困難があります。誰もが、実際の研究の過程で、できればいろいろな方法で研究を進めてみたいと思い、しかし、その方法がよく分からないという状況にはぶつかったことがあるでしょう。そうした状況を克服するための助けとなればと考えたのがマニュアル本の発行でした。既に何人



かの人たちからは原稿もいただいておりますが、そのままになっております。会長を引き受けることになり、前会長、前々会長とも相談しながらマニュアル本の編集・発行に向けて努力してみたいと思います。合わせて会員の皆様のご協力もお願いしたいと思っております。

最後に、年会費のことを少しだけ。上述したさまざまな学会活動を支えるために会員から集められた会費がありますが、このところ赤字経営が続いております。そのため、2004年（APGが年2回から3回へ増えた年）には現在の5千円から7千円への値上げが評議員会で審議されておりました。しかし、そのころは幸い余剰金が潤沢にあったため、しばらく

はその余剰金を取り崩すことで不足分を補う、という方針をとられたようです。この余剰金もいつかは無くなります。できれば単年度で収支が合うようにする必要があると思っております。各種経費の圧縮の努力をする一方、必要であれば年会費の値上げをお願いしたいと思っております。取り崩しを避けることができる余剰金については、何か別の形の使い道があっても良いと思います。その際には、皆様のアイデアをお願いします。

以上、幾つかこれからの努力目標のようなことを書かせていただきました。分類学研究の交流の場としての当学会が発展・充実するよう少しでもお役に立てるよう努めたいと思っております。

## 新評議員あいさつ

永益 英敏

今期（任期2009-10）の評議員は、いつもより1人多い13人で務めることになりました。代表してご挨拶申し上げます。

2つの学会の統合により新しい体制となつて、今年でまる8年となります。統合にいたるまでもいろいろなことがありましたが、統合後もよくこんなことができるなあ、と思えるほどたくさん「学会の仕事」がありました。限られた予算、限られた時間の中で、よりよい学会とするために様々なプランを実現し努力していただいた歴代の執行部のみなさまに感謝したいと思います。

学会の運営に限らないでしょうが、同じところに留まるためだけでも走り続けていなければならないのだ、ということを痛感します。研究の手法も目的もどんどんと変化しますし、研究成果の公開の方法、媒体も大きく変わりました。世界的な環境の変化により、多様性研究を目的の一つとする学会への社会的要請も大きくなっています。

走る方向を見誤らないよう、少しでも前へと進めるよう、そして会員のみなさまがより満足できる学会となるよう努力したいと考えています。ご意見・ご提案を歓迎します。どうぞよろしく願いいたします。

ニュースレターへの情報提供、寄稿大歓迎です。

ご連絡は下記まで。

東 隆行

〒060-0003 札幌市中央区北3条西8 北海道大学植物園

TEL: 011-221-0066 FAX: 011-221-0664

e-mail: azuma@fsc.hokudai.ac.jp

## 役員等一覧 (任期：2009年1月1日～2010年12月31日) ---

庶務幹事 東浩司

今期の役員等および委員会委員が以下のように決まりましたので報告いたします。委員の検討依頼が遅れたために、一部の委員会の委員が未決定です。これらの委員に関しては、総会で報告するとともに、次号のニュースレターに掲載いたします。

会長：戸部 博

\* 庶務幹事：東浩司

\* 会計幹事：堤千絵

\* 図書幹事：秋山弘之

\* ニュースレター担当幹事：東隆行

\* ホームページ担当幹事：坪田博美

編集委員長：岡田博

英文誌編集担当委員：永益英敏

和文誌編集担当委員：西田佐知子

植物分類学関連学会連絡会・日本分類学会連合担当委員：梶田忠

自然史学会連合担当委員：西田治文

講演会担当委員：篠原涉

\* 会則第11条で定める幹事

評議員：永益英敏，五百川裕，門田裕一，角野康郎，黒沢高秀，瀬戸口浩彰，高橋英樹，田村実，西田治文，野崎久義，藤井紀行，邑田仁，遊川知久

監事：益山樹生，白岩卓巳（今年度の総会まで）

編集委員：永益英敏（英文誌担当），西田佐知子（和文誌担当），秋山弘之，伊藤元己，角野康郎，川窪伸光，瀬戸口浩彰，高橋英樹，高橋正道，高宮正之，西田治文，根本智行，野崎久義，原田浩，村上哲明，綿野泰行，David E. BOUFFORD，Madjit I. HAKKI，Deyuan HONG，Jae-Hong PAK，Ching-I. PENG，Benito C. TAN

委員会

絶滅危惧植物・移入植物専門第一委員会：角野康郎（委員長），勝山輝男（副委員長）

絶滅危惧植物・移入植物専門第二委員会：柏谷博之（委員長），細矢剛（菌類まとめ役），服部力，吹春俊光，出川洋介，坂塚健太郎，井上正鉄（地衣類まとめ役），中西稔，柏谷博之，渡邊信（藻類まとめ役），千原光雄，田中次郎，野崎久義，樋口正信（コケ類まとめ役），岩月善之助，古木達郎，長谷川二郎，山口富美夫

植物データベース専門委員会：伊藤元己（委員長）

学会賞選考委員会：村上哲明（委員長），梶田忠，白岩卓巳，高宮正之，坪田博美，藤井紀行

## 諸報告

### 第8回日本植物分類学会賞（学会賞・奨励賞）受賞者の決定

学会賞選考委員会委員長 西田 治文

学会賞は、推薦があった6名の候補者について学会賞選考委員会において協議した結果、下記の2名が受賞者に決定しました。奨励賞は優れた研究業績をあげた将来有望な研究者（学生を含む）を顕彰するために、平成19（2007）年度から授賞することになった賞です。奨励賞候補者として6名が推薦されましたが、下記の3名の方が受賞者に決定しました。両賞受賞者の主な授賞理由は以下の通りです。

#### 学会賞

高橋 正道 氏（新潟大学理学部・教授）

「日本におけるメソフォッシル研究の展開と、特に白亜紀被子植物花化石研究及び、永年にわたる花粉形態研究における貢献」

高橋氏は、被子植物の多様な花粉や白亜紀の植物化石を用いて、被子植物の系統と進化に関して明らかにされ、「被子植物の起源と初期進化」を著し、研究内容の普及に努めた。特にメソフォッシルの研究ではアジア唯一の成果を挙げ、X線利用にも挑戦されている。

太刀掛 優 氏（元広島県呉市教員）

「広島県を中心とした地域植物誌研究及び、永年にわたる帰化植物研究と関連出版物の刊行による貢献」

太刀掛氏は、広島県呉市の教員として勤務する傍ら、40年以上にわたって呉市の植物誌、呉市周辺の社叢林の調査・記録を継続された。特に「改訂増補 帰化植物便覧」（2007）は、日本の植物学・環境学に対して、計り知れない貢献をもたらしている。

#### 奨励賞

有川 智己 氏（鳥取県立博物館・学芸員）

コケ植物の分類学的研究に分子系統学的手法を先駆的に導入し、ハイゴケ科キヌゴケ属モノグラフを完成させるなど、日本各地の蘚苔類フロラ解明において将来にわたる貢献が期待されること。

高山 浩司 氏（千葉大学理学部・学振特別研究員PD）

汎熱帯海流散布植物研究における集団遺伝学的解析による研究成果、特に海洋島固有種やマングローブ植物研究に着実な貢献をし、将来の発展も期待できること。

山田 敏弘 氏（金沢大学大学院自然科学研究科・講師）

化石被子植物及び現生の原始的被子植物の比較形態及び形態進化学的研究、及び日本国内における古植物学的研究に着実な貢献をし、将来の発展が期待されること。

今回の選考過程では募集開始を1ヶ月早めましたが、十分な応募が無く、選考委員会での追加推薦を行いました。会員各位には、賞の趣旨を再確認いただき、次年度の募集に際しましても積極的な応募と推薦をお願いいたします。

### 第3回日本植物分類学会論文賞の決定

論文賞選考委員会委員長 岡田 博

平成20年度の論文賞は編集委員会から推薦された論文の中から選考委員会にて厳正に審査し、以下の論文に決定しました。

Adjie, B., Takamiya, M., Ohta, M., Ohsawa, T. A. & Watano, Y.

Molecular phylogeny of the lady fern genus *Athyrium* in Japan based on chloroplast *rbcL* and *trnL-trnf* sequences.

APG 59 巻2号 79-95 ページ.

#### 選考理由

系統関係が良くわからなかったメシダ属をその中に入ってくるシケチシダ属のメンバーも含めて、葉緑体と核シングルコピー領域 (*pgiC*) の解析を行うことで、その中の構造を見事に解明している。葉緑体 DNA にコードされている *rbcL* だけではなく、核シングルコピー領域の分子系統学的解析をあわせて行っているところが高く評価できる。

### 2008年度日本植物分類学会講演会の報告

前講演会担当委員 布施 静香

8回目の日本植物分類学会講演会が2008年12月13日(土)に大阪学院大学で開催されました。今回は、全国から40名の参加者がありました。ご講演いただいた5名の演者とその話題は次のとおりです。

福原 達人 (福岡教育大学教育学部) : Heterodichogamy の自然史

永益 英敏 (京都大学総合博物館) : インドネシア・スラウェシの旅

高相 徳志郎 (総合地球環境学研究所・研究部) : ソテツ精子が泳ぐ液はどこから分泌されるのか  
— カートガサワラの花粉管伸張と関連づけて

角野 康郎 (神戸大学理学研究科) : 日本の水草 — 『日本水草図鑑』以降の新知見と課題

岡田 博 (大阪市立大学理学部附属植物園) : ヤブカラシを求めてあちらこちら

開花の各ステージを示す写真や解剖学的な写真など、美しく非常に分かりやすい画像・映像を多く用いてご説明くださり、とても楽しい講演会となりました。快くご講演を引き受けてくださった上、大変興味深いお話をしてくださった演者の先生方、会場の提供及び準備をしてくださった大阪学院大学の林一彦先生、当日の進行をしてくださった大阪市立大学大学院の田村実先生に感謝いたします。



講演会の様子 (撮影: 布施 静香)。

## 植物分類学会講演会に参加して

今村 格 (大阪医科大学)

今年の講演会では、クルマ・ナンキンハゼ・タブノキ・アボカド・ソテツ・水草全般・ヤブガラシといった、日常生活でよく見聞きする植物を扱う話が多く、学生の私にも身近に思える話題でありました。先生方のお話は、長年の研究に裏打ちされたいへん奥が深く、研究の対象にされている植物の種やタクソンに対する並々ならぬ思い入れを感じさせていただくことができました。岡田先生の最後のスライド写真の「あばたもえくぼ」一つまり害草の茂みすら宝の山に見えてくること一がとくに印象的で、研究に対する取り組みの範を示されたように思いました。

実際のお話の中で衝撃的だったのは角野先生の水草の話題であり、昭和30年代に田畑の害草として挙げられていた植物の多くが今やレッドリストに載せられていることには驚きを禁じ得ませんでした。また、(10年位前

に出た図鑑の記述だったと記憶するのですが) 農薬の使用によってすっかり姿を消したはずのアゾラがアイガモ農法の流行とともに力を盛りかえし、田の赤潮といわれる位にまでなっているとのこと。先生のお話から、古い教科書や図鑑の記載にとらわれず、つねに新しい動向にアンテナを伸ばしておくことの必要性を感じました。

たいへん楽しく聞けたのは永益先生の「インドネシア・スラウェシの旅」のお話でした。数多くの南洋の美しい写真とともに、実際の調査とはどのようなものなのか、についてわかりやすくご説明くださり、実地調査の大変さをあらためて感じました。

今回は講演された先生方の、研究分野のみならず植物群・分類学全体に対するお考えに接することができ、たいへん有意義な勉強をさせていただくことができました。来年もまた、ぜひ参加したいと思っております。

## 2008年度第1回メール評議員会議事抄録

前庶務幹事 五百川 裕

2008年12月16～26日に2008年度第1回メール評議員会が開催されましたので、議事抄録を報告します。この会議は会計決算案と予算案、事業報告案と事業計画案を評議員の方々に審議していただき、総会までの会務・会計執行の指針を得るためのものです。なお、本ニュースレターでお知らせする、3月12日の評議員会と14日の総会に提案される議案には、その後の推移を反映した最低限の修正が加えられている箇所がありますことを、ご了承ください。

開催日時：2008年12月16日～26日12:00

開催方法：電子メール等の媒体を用いた会議

参加者：評議員全員

議長選出

慣例に従い邑田仁氏を議長とすることに反対はなかった。

審議事項

第1号議案 2008年度決算案

第2号議案 2009年度予算案

第3号議案 2008年度事業報告案・2009年度事業計画案

## 審議結果

第1～3号議案は承認10, 非承認0, 白票2で, 承認された。

議事録署名人として藤井伸二氏と黒沢高秀氏が選出された。

## 庶務報告 (2008年11月～2009年1月)

庶務幹事 東浩司 前庶務幹事 五百川裕

庶務報告では学会が交わした契約, 転載許可, 連絡, 行った会議などで, ニュースレターの他の記事で紹介されていないものをお知らせしています。

- ・大学評価・学位授与機構から学会会長へ機関別認証評価委員会専門委員候補者の推薦依頼があったことに対して, 評議員に諮り, 西田治文氏と村上哲明氏を当該候補者として推薦する書類を送付した(11月6日)。
- ・日本学術会議科学者委員会から依頼があった「新公益法人への対応及び学協会の機能強化のための学術団体調査」に対して回答した(12月15日)。

## お知らせ

## 日本植物分類学会第8回大会公開シンポジウムのお知らせ

公開シンポジウム世話人 米倉浩司

日本植物分類学会第8回大会において以下のようなシンポジウムを開催いたします。公開シンポジウムは, 参加費無料です。皆様, ふるってご参加下さい。また, 周りの日本植物分類学会会員でない方々にも宣伝して下さいと幸いです。

[テーマ] 「東北地方の植物相の成り立ち」

[日時] 2009年3月15日(日)

午後1時00分～4時40分

[会場] 宮城県民会館

(東京エレクトロンホール宮城)601 会議室



## [プログラム]

## 1. 上野 雄規 (東北植物研究会) 「東北地方を北限とする植物の密集地」

一般の図鑑で関東地方以西に分布すると書かれている植物のかなりのものが, 実は東北地方にも分布しています。面白いことに, こうした植物の数は単純に南から北へ向かって少なくなるのではなく, 集中して生えている場所があります。なぜそのような分布パターンができたのかという点, その他分布上の様々なトピックに関して紹介します。

## 2. 門田 裕一 (国立科学博物館) 「東北地方のアザミ —ナンブアザミと所属不明のアザミたち—」

ナンブアザミにはこれまで *Cirsium nipponicum* という学名が使われてきました。ところがタイプ標本を調べたところ, これは今現在ナンブアザミと呼んでいるものとは異なることが分

かりました。それでは、*Cirsium nipponicum* とはいったいどのようなアザミなのでしょう？  
この他、未だに所属がよくわからない東北地方のアザミをご紹介します。

3. 牧 雅之 (東北大学) 「植物における種間交雑の重要性: 東北地方に分布する植物を例として」  
植物においては、種間交雑は比較的頻繁に見られる現象です。植物の進化における種間交雑の重要性についてはさまざまな議論がなされてきましたが、近年ではその重要性は多くの研究者に認められつつあります。この講演では、東北地方に分布する植物群を対象に、異なる観点から行なった種間交雑の研究を紹介します。

4. 藤井 紀行 (熊本大学) 「分子データからみた東北地方の高山フロラの成立過程」

東北地方の高山帯フロラは、ヒナザクラやチョウカイアザミといった固有種を有すること、超塩基性岩である蛇紋岩などからなる早池峰山の存在、火山性の山岳 (秋田駒ヶ岳や月山など) が多いことなどから、植物地理学的に興味深いものがあります。近年、DNA の分子マーカーを用いて、この東北地方を含めた日本列島の高山帯フロラの成立過程に関する研究が進められてきました。本講演ではそれからの研究を通して見えてきた東北地方の高山フロラの成立過程についてレビューします。

## 2009 年度総会における審議事項

庶務幹事 東 浩司

3 月 14 日に開催される総会において、以下の議案が審議されます。会員各位の参加をお願いいたします。

- (1) 2008 年度事業報告案 (本ページ参照)
- (2) 2008 年度決算報告案 (11 ページ参照)
- (3) 2009 年度事業計画案 (12 ページ参照)
- (4) 2009 年度予算案 (13 ページ参照)
- (5) その他

### 2008 年度事業報告 (案)

#### (1) 集会等の開催

##### ・学術集会, 講演会, 研修会

年次学術集会 (日本植物分類学会第 7 回大会) を首都大学東京で開催した (3 月 20 ~ 23 日) (ニュースレター No. 29 で報告)。

2008 年度野外研修会を福島県安達太良山と裏磐梯で開催した (9 月 5 ~ 7 日) (ニュースレター No. 31 で報告)。

2008 年度講演会を大阪学院大学で開催した (12 月 13 日) (本ニュースレター 6 ページ参照)。

##### ・総会, 評議員会

年次総会を年次学術集会に合わせて開催した。 (3 月 22 日) (ニュースレター No. 29 で報告)。

評議員会を 2 回 (ニュースレター No. 29, 31 で報告), メール評議員会を 1 回 (本ニュースレター 7 ページ参照) 開催した。

## (2) 出版物の刊行

- ・学会誌の発行  
英文誌『Acta Phytotaxonomica et Geobotanica』第59巻1-3号(計3冊)を発行した。  
和文誌『分類[日本植物分類学会誌]』第8巻1-2号(計2冊)を発行した。
- ・ニュースレター『日本植物分類学会ニュースレター』28-31号(計4冊)を発行した。

## (3) 委員会活動

- ・絶滅危惧植物・移入植物専門第一委員会
- ・絶滅危惧植物・移入植物専門第二委員会
- ・植物データベース専門委員会(日本産植物和名-学名辞書作成継続)
- ・学会賞選考委員会(本ニュースレター5ページ参照)
- ・大会発表賞選考委員会(3月に発足, ニュースレターNo. 29で報告)
- ・論文賞選考委員会(本ニュースレター6ページ参照)
- ・国際植物命名規約邦訳委員会(在庫管理, 販売)

## (4) 表彰

- ・第7回日本植物分類学会賞(学会賞・奨励賞)の授与を行った(ニュースレターNo. 28で報告)。
- ・第3回日本植物分類学会大会発表賞の授与を行った(ニュースレターNo. 29で報告)。
- ・第2回日本植物分類学会論文賞の授与を行った(ニュースレターNo. 28で報告)。

## (5) 国内外の関係学術団体との連携・協力

- ・学会連合等への参加・連携を行った: 日本学術会議, 植物分類学関連学会連絡会, 自然史学会連合, 日本分類学会連合。
- ・日本・韓国・中国合同国際シンポジウム「東アジアの植物多様性と保全」を社団法人日本植物園協会と共催で北海道大学において開催した(2008年8月2日)。
- ・以下のシンポジウムの開催に協力した。日本分類学会連合共催シンポジウム「動物界高次分類群の系統と分類 - 発生から分子へ -」(2008年1月12日, 国立科学博物館分館)・「最近の植物科学の進歩—植物とは? あらためて考えて見よう」(2008年9月20日, 東北大学), 植物分類学関連学会連絡会共催シンポジウム「2007年植物レッドリストからみえる保全生物学的課題」(2008年9月25日, 高知大学), 自然史学会連合講演会「自然史研究最前線—恐竜からDNAまで—」(2008年11月15日, 千葉県立中央博物館)。

## (6) その他

- ・学会刊行物のバックナンバー等を販売した。
- ・植物分類学関連情報(学術集会, 研究動向, 出版物, 公募)を収集し, ニュースレター, ホームページ等で提供した。
- ・学会刊行物の国内外の研究機関への寄贈と交換を行った。
- ・学会公式メーリングリストを創設し, 情報提供の迅速化を図った。
- ・植物分類学マニュアルの編集(継続)。

## 2008 年度決算報告 (案) (2009. 1. 12 現在)

収入の部	単価	数	2008 年度予算	2008 年度決算	予算との差異
会費					
一般会員	5000	810	4050000	3783560	266440
学生会員	3000	80	240000	183100	56900
団体会員	8000	25	200000	184000	16000
バックナンバー販売			100000	315755	△ 215755
利息			20	2706	△ 2686
雑収入			50000	44160	5840注 1
小計			4640020	4513281	126739
繰越金			8825739	8825739	0
合計			13465759	13339020	126739
支出の部					
大会補助費			100000	0	100000注 2
講演会補助費			30000	29105	895
出版物印刷費					
APG (58(2,3) -59(1-3)) 印刷費	700000	4	2800000	2599594	200406注 3
和文誌印刷費 (8(1,2))	550000	2	1100000	1104600	△ 4600
NL28-31 印刷費	70000	4	280000	232600	47400
英文校閲費			120000	98365	21635
出版物送料					
APG 送料	110	3000	330000	268198	61802
和文誌送料	145	2000	290000	72685	217315注 4
NL 送料	110	2000	220000	121778	98222注 5
会議費			130000	0	130000
学会賞賞金・表彰経費			70000	70000	0
大賞 30,000 円 × 2, 奨励賞 10,000 円 × 1			20000	20000	0
自然史学会連合負担金			10000	10000	0
分類学会連合分担金					
事務費					
消耗品費			50000	12407	37593
アルバイト賃金 (発送代行料を含む)			180000	178243	1757注 4, 5
封筒等印刷費			50000	0	50000
通信費 (小包手数料を含む)			200000	40320	159680
手数料・その他			20000	27515	△ 7515注 6
自動振替集金代行基本料			3150	3150	0
自動振替口座確認手数料	182	120	21840	24171	△ 2331
レンタルサーバ使用料			15000	13860	1140
予備費			400000	92022	30798注 7
小計			6439990	5018613	1421377
次年度への繰越			7025769	8320407	△ 1294638
合計			13465759	13339020	126739

注 1: 著作権使用料 43,660 円など

注 2: 2008 年度は補助せず

注 3: APG 58(2,3) 出版遅れにより 2008 年度支払い

注 4: 「分類」8(2) は APG 59(2) と同時発送

注 5: NL28 は「分類」8(1) と、NL30 は APG 59(2) と同時発送

注 6: 振込手数料、インターネットバンキング手数料など

注 7: 国際シンボ補助 68,577 円、献花代 15,750 円、選挙費用 7,695 円

## 特別会計 2008 年度決算 (案)

収入	2008 年度予算	2008 年度決算	予算との差異
前年度繰越金	701095	701095	0
国際植物命名規約邦訳販売収入	1400000	1497016	△ 97016注 8
利息	0	0	0
合計	2101095	2198111	△ 97016
支出			
国際植物命名規約邦訳販売予備費	100000	2100	97900注 9
次年度への繰越金	2001095	2196011	△ 194916
合計	2101095	2198111	△ 97016

注 8: 主に定価 (割引なし) 販売割合が見込みより多くなったことによる増収

注 9: ISBN 登録費用のみの支出であったため

## 2009 年度事業計画 (案)

## (1) 集会等の開催

- 学術集会, 講演会, 研修会  
年次学術集会 (日本植物分類学会第 8 回大会: 東北大学 (3 月 12 ~ 15 日)) を開催する。  
2009 年度講演会を開催する。  
2009 年度野外研修会を開催する。
- 総会, 評議員会  
年次総会を年次学術集会に合わせて開催する (3 月 14 日)。  
評議員会を開催する (3 月 12 日)。

## (2) 出版物の刊行

- 学会誌の発行  
英文誌『Acta Phytotaxonomica et Geobotanica』第 60 巻 1-3 号 (計 3 冊) を発行する。  
和文誌『分類 [日本植物分類学会誌]』第 9 巻 1-2 号 (計 2 冊) を発行する。
- ニュースレター『日本植物分類学会ニュースレター』32-35 号 (計 4 冊) を発行する。

## (3) 委員会活動

以下の委員会を組織し, 目的に沿って活動する。

- 絶滅危惧植物・移入植物専門第一委員会
- 絶滅危惧植物・移入植物専門第二委員会
- 植物データベース専門委員会
- 学会賞選考委員会
- 大会発表賞選考委員会
- 論文賞選考委員会

## (4) 表彰

- 第 8 回日本植物分類学会賞 (学会賞・奨励賞) の授与を行う。
- 第 4 回日本植物分類学会大会発表賞の授与を行う。
- 第 3 回日本植物分類学会論文賞の授与を行う。

## (5) 国内外の関係学術団体との連携・協力

- 国内学会連合等への参加・連携を行う: 日本学術会議, 植物分類学関連学会連絡会, 自然史学会連合, 日本分類学会連合など。
- 韓国および中国の植物分類学会と連携し, 合同国際シンポジウムの開催に協力する。

## (6) その他

- 学会刊行物のバックナンバー等の販売を行う。
- 植物分類学関連情報 (学術集会, 研究動向, 出版物, 公募) を収集し, ニュースレター, ホームページ等で提供する。
- 学会刊行物の国内外の研究機関への寄贈と交換をする。
- 植物分類学マニュアルの編集を継続する。

## 2009 年度予算 (案)

収入の部	単価	数	2008 年度予算	前年度予算との差異
会費				
一般会員	5000	815	4075000	25000
学生会員	3000	80	240000	0
団体会員	8000	25	200000	0
バックナンバー販売			100000	0
利息			20	0
雑収入			50000	0
小計			4665020	25000
繰越金			8320407	△ 505332
合計			12985427	△ 480332

支出の部				
大会補助費			100000	0
講演会補助費			30000	0
出版物印刷費				
APG (60 (1-3))	700000	3	2100000	△ 700000 注1
和文誌 (9 (1-2))	550000	2	1100000	0
NL32-35	70000	4	280000	0
英文校閲費			120000	0
出版物送料				
APG 送料	110	3000	330000	0
和文誌送料	145	2000	290000	0
NL 送料	110	2000	220000	0
会議費			130000	0
学会賞賛金	大賞 30,000 円 × 2, 奨励賞 10,000 円 × 3		90000	△ 20000 注2
自然史学会連合負担金			20000	0
分類学会連合分担金			10000	0
事務費				
消耗品費			50000	0
アルバイト賃金 (発送代行料を含む)			180000	0
封筒等印刷費			300000	250000 注3
通信費 (小包手数料を含む)			200000	0
手数料・その他			25000	5000 注4
自動振替集金代行基本料			3150	0
自動振替口座確認手数料	190	126	23940	2100 注5
自動振替新規手数料	105	10	1050	1050 注6
レンタルサーバ使用料			15000	0
予備費			200000	△ 200000 注7
小計			5818140	△ 621850
次年度への繰越			7167287	141518
合計			12985427	△ 480332

注1：昨年度は前年度出版分を含んでいたことによる減額

注2：2009 年度は奨励賞 3 名のため増額

注3：事務局移転年度のため増額

注4：会計事務の迅速化を図るためのインターネットバンキング導入に対応した増額

注5：昨年度まで消費税が計上されておらず、さらに自動振替利用会員の増加に対応するため増額

注6：実態に合わせて手数料を計上したことによる支出項目追加

注7：役員選挙や日本で国際シンポジウム等が行われないため減額

## 特別会計 2009 年度予算 (案)

収入	2009 年度予算	前年度予算との差異
前年度繰越金	2196011	1494916
利息	0	0
合計	2196011	94916

支出	2009 年度予算	前年度予算との差異
次年度への繰越金	2196011	194916
合計	2196011	94916

## 評議員会開催のお知らせ

庶務幹事 東 浩司

日本植物分類学会第8回大会（於：宮城県民会館（東京エレクトロンホール宮城））の開催に合わせ、下記の通り評議員会を開催します。評議員、幹事会等の関係各位の出席をお願いいたします。

日時： 2009年3月12日（木）16時～19時

会場： 東北大学植物園・津田記念館（植物標本館）1階ラウンジ

詳細は関係各位において連絡いたしますが、今回の評議員会においては、総会における審議事項と同様の内容が審議される他、会則の改定について、その他の審議が予定されております。審議事項についてご意見、ご希望がございましたら、評議員、会長、幹事、委員長のいずれかにお伝えください。

## 2009年度野外研修会のお知らせ

田中 伸幸（高知県立牧野植物園）

「瓶が森周辺および錦山のツツジと土佐の植物」

○期日と日程：2009年5月15日（金）～17日（日）

第1日目（15日）： 13：00 JR高知駅集合（空港からは空港連絡バスをご利用下さい。片道700円）。高知駅より高岡郡日高村の錦山へ。錦山にて植物観察。高知市内ホテル泊（予定：コンフォートホテル高知駅前、または同等クラス）。

第2日目（16日）： 吾川郡いの町に移動。村道瓶が森線から瓶が森へ登る山道を歩きながら植物を観察。「山荘しらす」泊。大浴場有り。石鎚山の眺望よし。懇親会（雉料理、鍋物、山菜など）。

第3日目（17日）： 瓶が森から高知市内へ。植物園レストランで昼食後、2008年4月にリニューアルした牧野植物園内を植物観察しながら散策。ハーバリウムや文庫など普段開放していない施設のご案内。午後3時解散（空港へは高知駅より空港連絡バスをご利用下さい。片道700円）。

今年度の野外研修会は、南国、高知県で行います。時期的には少し遅めですが、ツツジの季節にあたります。そこで、高知県本川村の瓶が森周辺および高岡郡日高村の錦山を歩き、ツツジを中心に5月の土佐の植物を牧野植物園に勤務して30年以上、高知の植物の生き字引と称される稲垣典年氏の案内で観察を行います。

高知県と愛媛県の県境に位置する瓶が森では、石鎚山の眺望もよい山道を歩きながら植物観察を行います。シロヤシオ、ツルギミツバツツジ、アケボノツツジ、ヒカゲツツジなどが見られるでしょう。また、季節的にはイシヅチザクラの花も見ることが出来ると思います。一方、日高村の錦山では、カザグルマ、イカリソウのほか、ツツジ科ではニシキコバノミツバツツジやドウダンツツジ群落が観察できます。また、錦山は蛇紋岩地ですので、蛇紋岩地の植生も観察できます。さらに、普段は植栽で目にするものが多いトサミズキの自生が見られます。

最終日には高知県立牧野植物園の50周年記念庭園を中心に平成20年4月に新しくなった園内を散策しながら植物を観察していただこうと思います。5月は植物園が最も綺麗な季節です。時間の都合もありますが、公開していないハーバリウムや牧野博士の蔵書が収蔵してある牧野文庫もご案内する予定です。牧野植物園には、高知県植物誌の基礎となったデータベース化された標本のほか、ミャンマー、タイ、中国など海外の標本、牧野博士の標本など約21万点が収蔵されています。また、牧野文庫には、牧野博士の蔵書約4万5千冊があります。

参加費用（JR高知駅到着から解散までの宿泊費、朝夕の食事代、弁当代、懇親会費、集合から解散までの交通費など）：一般30,000円程度（ご参加者の人数により予告なしに多少変更する場合がありますのであらかじめご了承下さい）

申込み：〒781-8125 高知市五台山4200-6  
 高知県立牧野植物園 田中伸幸宛  
 TEL: 088-882-2725, FAX: 同左（研究室直通）  
 または、TEL: 088-882-2673（ハーバリウム事務）  
 e-mail: nbtanaka@makino.or.jp

なるべくメールでお申込みください。尚、郵便、ファックスでも受け付けます。申込みの際には、氏名、連絡先住所、電話番号、メールアドレス、高知までの交通手段（飛行機、自動車、自家用車等）を明記していただき、4月15日までにお申込み下さい。申込み順に20名で締め切らせていただく予定です。

## 寄稿

### 大型加速器 SPring-8 と白亜紀の花化石

#### — X線マイクロCTのよもやま話 —

高橋 正道（新潟大学）

白亜紀の1億年以上も前の地層から発見される花化石は、驚くほど内部の3次元的な構造が保存されている。ところが、その内部の構造を明らかにするためには、連続切片法か、凍結切断で、花化石を破壊しなければならなかった。白亜紀の花化石は炭化しているので、花化石の連続切片法は、現生植物でのようにはうまくいかない。花化石を破壊しないで、内部構造を解明できるのは、X線マイクロCTである。市販されている一般的なX線マイクロCT装置もあるので、いろいろと試してみたが、結局のところ、炭素が主成分の花化石を高コントラスト・高分解能で3次構造を解明するために、大型加速器 SPring-8 のビーム



図1. SPring-8。

ラインを使うことになった。大型加速器と言えば、今年のノーベル物理学賞で有名になった素粒子の研究に使われる巨大科学であって、物理が苦手な私とは全く無関係な話であると考えていた。どのようにして、この大型シンクロトロン SPring-8 を使うようになったかの

経緯を詳しく説明するだけの紙面もないので省かせていただくが、昨年の4月には、兵庫県にある大型加速器 SPring-8 で、徹夜で花化石の高解像度イメージングの観察実験をしていた。

SPring-8 は、第三世代の大型放射光施設とよばれ、加速された高エネルギービームから発生する放射光を利用して実験・研究する世界最大級の施設である。1997年に完成し、周囲1436mのリングの周囲には62本のビームラインがあり、素粒子科学、材料物性、タンパク質の立体構造解明など、多くの研究分野に活用されている。

私は、SPring-8の中で、花化石を直径3mのアクリルの先端に付けて、ハッチ内にセットして、少しずつ回転させながら、1個あたりの化石で約2時間かけて1800枚のX線透過像を撮影した。この間、モニターを監視し続けることになる。ビームは1日中連続して流れているので、次々と化石を交換しては、CT撮影が続けられる。当然、寝こんでしまうことなどは許されるものではない。これらの1800枚の透過像から1000枚のCT像を



図2. リング内部。

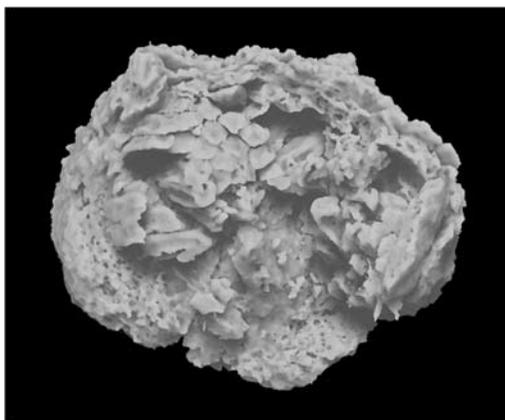


図3. X線マイクロCTで撮影した花化石（撮影：高橋正道）。

構築していく。さらに、これらの連続したCT像を積み重ねることによって3次元的に構築していくのである。このためには、64bitのワークステーション上でラトックシステム社のTri3DVOLというソフトを使用する。3次元構築にはいろいろなソフトが開発されているが、ラトック社のソフトは、花化石の中で必要な部分を抽出したり、除去することができるという特徴があるので使っている。もちろん、回転しながら、全体像を表示したり、切断像を連続的に表示することができる。最近の電子版ジャーナルでは、動画の表示もできるようになっているところがあるので、動画をくみこんだ論文発表も可能になってきた。また、Adobe Reader 9によって、pdf化された動画を見ることもできるようになった。

大型加速器 SPring-8 の高解像度 3D イメージングによって、「地上最初の花」を明らかにしたいと考えている。現在、花化石の動画をホームページ <http://env.sc.niigata-u.ac.jp/~masa/> で公開している。

## 書評

### 樹木の種類を覚えるのがちょっと苦手な人に

「花実でわかる樹木—951種の検索」 馬場多久男著

信濃毎日新聞社、A5版、416ページ、オールカラー、定価税込み3,675円

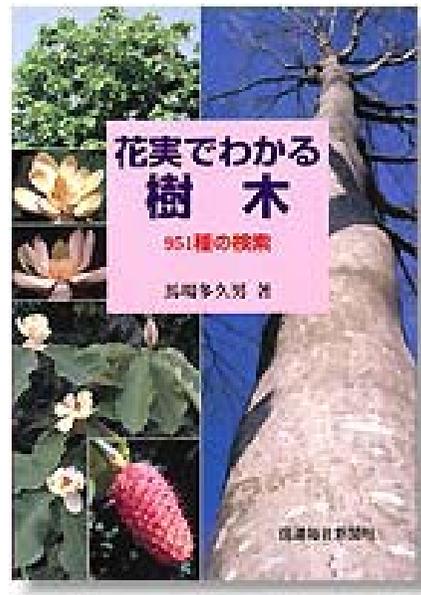
ISBN978-4-7840-7093-0

本州産を中心とした樹木 951 種が、4,500 枚以上の鮮やかなカラー写真とともに紹介されています。この本の最大の特長は、花と実のそれぞれで調べられる総検索表が載っていて、これは何科なのかまったく見当がつかないような樹木でも、その種にたどり着けるようになっているところです。私はヤナギを研究している割には草本の方が好きで、特に暖かい地方の樹木の種類はちょっと苦手にはしているのですが、この総検索表はそんな私でも簡単に調べられるかも知れないと思わせてくれます。また、用語についても写真と図で丁寧に説明されているので、難しい用語はちょっと…と敬遠されている方や初心者にもわかりやすい内容です。個人的にはいろいろな毛の形の説明が気に入りました。腺毛、伏毛、鱗毛、絹毛、綿毛、縮毛…あらゆる毛が写真一覧に載っているのです。「開出毛って何ですか?」と訊いてくる学生さんには、今度からこの写真を見せることにします。

北海道に住む私にとって、地元で見られるいくつかの樹木が掲載されていないのがちょっと寂しいところですが、暖かい地方に旅行したときに普段目にしない樹木を調べるときには、この本はかなり頼りになると思われます。次のフィールドシーズンに内地（本州以南のことを北海道ではこう呼んでいます）に行く時はこの本を使ってみるつもりです。樹木の種類を覚えるのがちょっと苦手だけど、簡単に樹木について調べられる図鑑が欲しいという人は、一度この本を手にとってみて欲しいと思います。

また、この本の著者は過去に「冬芽でわかる落葉樹」「葉でわかる樹木」を出しているのです、すでに手にしている会員の方もいらっしゃるかもしれませんが、私はこちらの2冊はまだ読んでいませんが、機会があれば参照してみたいと思います。

(東 隆行)



#### 編集後のひとこと

庶務幹事の東さんとニュースレター幹事の東さん。もう覚えていただけたでしょうか？ちなみに私は「モクレンの東さんですよ?」と声をかけられたことが2回ほどあります。ニュースレターの、いえいえヤナギの東さんと認識してもらえるように頑張らなければ…。でも裏表紙の枠内を見たら、これはますます混乱しそうですね。

By 編集人

## いきもの便り

## イカリソウ—春の訪れを告げる花—

堀江 佐知子 (東北大学)

このニュースレターをお読みの皆さんの好きな季節は何ですか？

日本には四季の移り変わりがあり、それぞれ自然が造る美しさを感じられますが、植物や自然が好きな方達にとって、春を待ちわびておられる方は多いのではないのでしょうか。優しい陽の光に照らされて、新緑の爽やかな色に彩られ生命の息吹を感じることができる、そんな春が訪れたことを知らせてくれる花の一つにイカリソウがあります。

イカリソウ属 (*Epimedium*) 植物はメギ科の多年生草本で、林縁や比較的明るい林内に生育します。花卉は四枚で、しばしば基部から四方に伸びた長い距を持ち、その先端に蜜を蓄えます。また、二枚から三枚の複葉を持ち展開したばかりの葉の透明感のある鮮やかな色は林の中でひときわ目を引きまします。開花期は4月から5月頃で、春を待っていたハナバチ達が下向きに咲いた花から蜜や花粉を健気に集める姿を見ることができます。それから約一ヶ月経つと、膨らんだ果実から鮮やかな緑色の種子がこぼれ落ちるのですが、この種子には種枕がついており、アリによって散布されます。この時点の種子は未成熟で夏秋冬と種子のままで過ごし、翌春小さな双葉を出すという生活史を持っています。

日本には外部形態的に明らかに区別できるイカリソウの仲間が多数分布していますが、それらが接触する地域で、しばしば交雑に由来すると思われる個体が見られます。例えば、仙台市近郊ではキバナイカリソウの特徴である淡黄色の花を持つ個体とイカリソウ (狭義) の特徴である紅紫色の花を持つ個体とともに、花卉の部分は淡黄色で萼の部分は紅紫色の個体が高い頻度で見られる集団が複数存在します。これらの集団よりも内陸寄りでは、花全

体が淡黄色の個体の頻度が高くなり、ある地点から先は淡黄色の花を持つ個体ばかりになります。一方、この集団から海寄りの集団では花全体が紅紫色の個体が多くなり、ある地点からは全て花が紅紫色の個体ばかりになります。現在、キバナイカリソウは本州の近畿以北から北海道にかけての日本海側を中心に分布しており、イカリソウは本州の近畿以北の太平洋側を中心に分布しています。この2つの分類群は、過去には完全に離れて異所的に分布していたものが、気候変動など何らかの要因によって、分布の移動が起こり、一方の種あるいは両方の種が分布を広げるに当たって接触するようになり、今現在見られる交雑集団が形成されたものと推測されます。

このような異なる分類群間で人工交配を行うと種子は問題なく結実し、その交雑個体にも稔性があります。従って、もしキバナイカリソウとイカリソウの遺伝子交流が生じる状態が続けば、結果として完全に混ざってしまう可能性も考えられます。あるいは何らかの理由によってキバナイカリソウの性質を示すものはイカリソウの分布域には侵入できず、その逆も成り立っている状態にあるのかも知れません。

イカリソウ植物は自家不和合性で種内における自他の認識機構は確立していますが、分



図1. 中国地方のバイカイカリソウとトキワイカリソウの交雑集団。(撮影：堀江 佐知子)

類群間での生殖的隔離は弱く、キバナイカリソウとイカリソウ以外のさまざまな組み合わせで交雑個体が見られます (図 1)。

イカリソウの仲間達が、これまでどんな歴史を辿ってきたのか、そして今後どのような未来が待っているのか、今後もさまざまな観点から解析を進めて皆様にご報告していきたいと思っています。

イカリソウは見たことがあるのだけれど交雑個体はまだ見たことがないという皆さんは、桜が終わる頃、いつもより少し足を伸ばしていただくと、自然が作り出したさまざまな色や形のイカリソウに出会えるかもしれません。今後もイカリソウの仲間達が身近で比較的容易に出会える花として、野山に咲き続けられることを見守っていただきたいと思います。

## 旭山のトガリフカアミガサタケ

小林 孝人 (北海道大学)

札幌市中央区にある旭山記念公園は、シラカンバ林やドイツトウヒ林等があり、自然の残された公園です。また、タマゴトマヤタケ *Inocybe ovoidea* Takah. Kobay. が発見された場所でもあります。旭山記念公園で5月~7月にかけて、様々なアミガサタケの仲間が観られます。2007年~2008年に、トガリフカアミガサタケ、アシプトアミガサタケそしてトガリアミガサタケを採集しました。今回はトガリフカアミガサタケ *Morchella patula* var. *semilibera* (DC.) S. Imai (図 1) に注目したいと思います。

このきのこは、*Morchella semilibera* DC. として1805年に最初に記載されました。その後、北海道大学及び横浜国立大学の研究者であった、今井三子博士が *Morchella patula* Pers. の変種とする新組合せを1954年に提案しました。日本でこの学名が使われ続けていますが、欧米では現在 *Mitrophora semilibera* (DC.) Lév. の組合せが一般的とされています。

*Mitrophora* 属を作ったのは Lévillé で1846年のことです。得られた旭山産標本は2008年5月25日の採集 (No. 08.5.25.11) です。子実体は高さ153mmで本菌として大型でした。特徴は円錐形で帽状型な頭部で、幅42mmありました。柄の基部の溝も顕著でした。きのこ臭があり、味はうすい塩味。ただし、生食すると中毒すると言います。胞子紋は淡いクリーム黄色。本菌は子実体

の仲間です。胞子が子実体と呼ばれる袋内に作られる菌をそう呼んでいます。子実体の中に作られる胞子を特に子実体胞子と呼びます。

今回の標本の子実体胞子は楕円形で、表面は平滑、大きさ  $22-26 \times 11.5-16.3 \mu\text{m}$  (平均値 =  $24.4 \times 14.0 \mu\text{m}$ )、縦横比 = 1.5-2.1 (平均値 = 1.8)、通常1つの子実体に8個の子実体胞子を形成しました。子実体胞子は円筒形で、薄壁でした。

日本産生標本が得られたので、肉眼的呈色反応を調べてみました。塩化第二鉄 (20%) を子実体に滴下してみますと120分でオリーブ色を帯び、柄の表面は変色しませんでした。水酸化カリウム (5%) は反応がありませんでした。アニリン (99%) は子実体が1分でわずかに肉色になり、柄の表面も120分かかりましたが同色になりました。フェノール (2%) は両方とも120分で赤く変色しました。欧州で、このような反応を同定に用いており、日本の生標本を試してみたいかどうか。



図 1. 札幌市に発生したトガリフカアミガサタケ。